

『松浦宮物語』の作品世界と話型

朴 南 圭

研究の現在と問題点

平安朝の最盛期に成立した『源氏物語』によって、物語は完成の域に達していた。『源氏物語』は、成立当初から熱烈なファンを生み、源氏物語崇拜がおき、物語のバイブルのような存在となった。

そういう『源氏物語』の多大な影響下で作られ続けた中世物語は、『源氏物語』を安易に踏襲・模倣しているものとして、文学性が低いなどと評価されてきた。^①しかし、最近は、それらの作品を見直し、存在意義を問い直す動きが活発になっている。

『源氏物語』以降の物語群のなかから『松浦宮物語』をみると、まず、発想の新しさ（舞台を日本と中国のみならず天上界にまで広げた点）、構成（偽抜、省筆）、軍記表現（後に成立する軍記物語の先駆け）、偽装等々多くの特徴をみる事ができる。

『松浦宮物語』の研究史を概観すると、作者、成立時期の研究は、定説化するにつれ減少し、作品自体に対する研究が増えてきた。萩谷朴氏は、『松浦宮物語全注釈』の解説において、『松浦宮物語』を作者定家の実験小説としてとらえ、「物語全体の世界を構築している基本的プロットも、決してこの作品の主筋ではなく、この物語の世界において、次々と各種の実験劇を展開するための舞台を提供しているサブプロットに過ぎない」としている。これに対して三角洋一氏は、「ひとつの主題につらぬかれた、すぐれて構築的な物語である」とし、主人公には恋の物思いがつきないという主題につらぬかれていと論じている。

本論文では、『松浦宮物語』がひとつの主題による構築的な物語であるという立場で、主人公弁少将の恋の遍歴をふたつの話型に分類し、さらに「孝」をよむことによって新たな読みの可能性を試みた。

ふたつの話型とは、主人公の恋の遍歴を物語の空間を基準

に分けて、「悲恋談」と「渡航談」とみることであり、それに二つの恋が含まれるものとする。

以下は、この悲恋談、渡航談、また孝をめぐる、三節にわたって論じていくことにする。

悲恋談としての出発——ふたつの恋

まず「悲恋談」についてであるが、弁少将の神奈備皇女への初恋と、母親のことを悲恋談とした。前者について、遣唐使の宣旨が下ったのは皇女の入内が決まった後のことで、宣旨は二人の仲を裂く原因にはならず、むしろ、両親とりわけ母親に重く受け止められる。母親は積極的に行動し、無事を祈願するために筑紫に下向する。これは、悲恋談の一端を母親が担っていることを意味する。子に対する親の思いに松浦さよ姫の感情が加わっているのである。

主人公弁少将は、生まれつき容貌が世に優れ、学問がよくでき、父母はもちろん、帝までも彼の将来を楽しみにしていた。つねに学問にのみ熱中しつつも、神奈備の皇女という后腹でたいそう美しい方を是非とも妻にしよう、と思いついていた。この神奈備皇女こそ、実らぬ初恋の相手である。

悲恋とは実らぬ愛であり、悲劇性により、人々の共感と興味を誘う内容の悲恋談というかたちでひろく享受された。弁

少将は、恋の思いあまって菊の宴のときに、菊につけて恋の思いを告白する。

おほみやの庭のしらぎく秋を經てうつろふ心人知らんか
も (一頁)

恋死なば恋も死ぬべき月日經ていかに物思ふ我が身とか
知る (三頁)

いたづらに明かせる夜半の長き夜の曉露にぬれか行くへ
き (五頁)

燃えに燃えて恋ひば人見て知りぬべきなげきをさへに添
へてたくかな (七頁)

このように弁少将の尽きせぬ恋の思いは増幅していくけれども、皇女は距離を置いて対応する。近づけば離れてしまう存在であった。

恋愛への未熟さゆえか、何度も自分の気持ちを吐露するのだが皇女は応えてくれない。悲しみや物思いがつきない毎日である。側でそれを見ている父や母も何の助けにもなれずもどかしい思いでいる。そしてとうとう皇女は入内してしまい初恋は叶わぬものとなってしまふ。

三角氏は、初恋について、「華陽公主にまみえるやいなや皇女への初恋を精算し、帰朝ののちももはや皇女には見向きも

しなくなり、公主との蓬萊宮の契り、母后との第二天の契りのままで意味をなさなくなるのであった」としてゐる。またこの恋愛が物語全体において、さしたる重要性を持たないということから、構想上のずれを指摘する声もある。

弁少将の神奈備の皇女への恋が入内という形で終わってしまふことは、『伊勢物語』の「月やあらぬ」の歌で有名な第四段の、

人のいき通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂しと思ひつつなむありける。⁽⁶⁾

のような趣向を思いおこさせる。また、自分には届かない存在になってしまつてから後に遣唐使の宣旨が下るのである。悲恋を癒すには皇女から遠く離れる必要があり、このような悲しい別れと相応する形で渡航談が準備されているのである。遣唐使の宣旨は、弁少将を遁世のような状態にさせたのではないだろうか。

渡航談とふたつの恋

渡唐と琴の伝授という筋立ては『宇津保物語』を、また琴の音に導かれて女と契りを結ぶプロット、またその女性が転生するという展開は『浜松中納言物語』の河陽県の後をめぐ

る場面から撰取したものであろう。公主は『松浦宮物語』に登場する三人の女性の中でもっとも重要な役割を持つ。音楽の伝授者であり、主人公の少将と結ばれる存在なのである。単に關係を持つというに留まらず、子孫を残し繁栄をもたらし存在である。

八月十五夜、少将は望郷の念にかられて遣唐し、山上の楼で琴を弾く老人、陶紅英に会う。少将は老人に琴の伝授を願うが、老人は、自分よりすぐれた弾き手である公主を紹介する。また、それが前世の因縁によるものであることも告げられる。公主は仙人から琴を伝授された、帝の妹である。少将は、教えられた通り公主のもとを訪ね、秘曲を授けられる。しかし、老人によって禁止されたにもかかわらず、公主の美貌に心が乱れる。琴の伝授が終わった十月三日、二人は契りを結ぶ。

少将の渡唐の目的が秘曲の伝授にあることは、老人によつて、はじめて語られていた。物語の序盤に「管絃をならひても、師にはさしすすみふかきてどもをひけば、はてはては人にもとはず、おほくは心もてなむさとりける」とあるが、この記述を少将の渡唐につなげるには、いささか物足りない。少将は、管絃のみならず漢詩などにも才能があったし、その才能によつて、唐帝にも寵愛されている。

老人の予言で、秘曲伝授という、弁少将入唐の本来の目的

がはつきりと示されることになる。そして、秘曲を日本に持ち帰るのみならず、伝授した本人と結ばれることによって、音楽の家が起り、繁栄へとつながる。老人を媒介とした出会いは、『浜松中納言物語』にもみられるが、後に会う前の場面で、記述も少なく媒介の役割を積極的には評価しがたい。

老人の存在は、定家によって、大きく取り上げられた部分である。また、老人による禁忌や予言などは、公主との関係を緊迫したものにするとともに、引き立てることもなる。

ヒロインに会うためには、会わせるのにふさわしい人物が介在しているわけである。陶紅英なる人物の存在意義は、

①弁少将に秘曲を日本に持ち帰るといふ渡唐の真の目的を伝達する。

②弁少将に琴の名手である華陽公主を紹介する。

③戦乱の勃発と来世での公主との再会を予言する。

というところにある。これには、老人自身が、琴に詳しいことが前提になっていることはいままでもない。そのような賢者としての老人の存在は『源氏物語』⁽⁸⁾「明石」の、

なにがし、延喜の御手より弾き伝へたること四代になんなり侍ぬるを、かうつたなき身にて、この世のことは捨て忘れ侍ぬるを、物の切にいふせきおりおりは掻き鳴らし侍しを、あやしうまねぶもの侍こそ、自然にかの

先大王の御手に通ひて侍れ。山臥のひが耳に松風を聞きわたり侍にやあらん。いかで、これも忍びて聞こしめさせてしがなで、
(六六頁)

と、光源氏を明石の姫君へと手引きする明石の入道の資格と存在が影響していると思われる。少将は、華陽公主との別れに際して、公主から形見であるとともに、約束の証として「玉」を受け取ることになる。少将との契りによって死を迎えた公主とのプロットは、公主の死後中休みにはいるが、公主の遺言に従って「玉」を「肌身離さず」持ち続けたことによって継続される。

それもむかしの契といひながら、いとかうあるまじき心づかひをしつるも、我心のあやまりにもあらず。琴のこゑによりて、かならず身をほろぼすゆへともなるべしと、仙人のおしへしを思へば、いまこの時なり。これをかぎりとおもふとも、人の心のならひ、さてしもえやむまじきわざなれば、つるにみだれいでこんとす。まことに我をしのお心ふかく、あらぬ国にても、わすれたまふまじくは、こよひ、あだの命をうしなひて、かならずのちの世の契をむすばむ
(巻一、九〇頁)

と、公主は自分の死が、弁少将の繁栄のために必然的であることを語っている。また、死はタブーを破ったことに対する罰ではなく、再生を得るためであることが分かる。再生は、少将の手に委ねられる。「玉」は再生の約束であるが、これを守るのは少将に与えられた使命である。形見、お守り、そして印としての役割を同時に兼ねている。しかも「いみじき雨かぜのさはぎ、なみのした」でも注意して守るように言われていることから、「玉」は海の方の何かに狙われやすいことがわかる。「珠」はもともと海のなかのものである。

次に、華陽公主は具体的な転生の方法を語る。それは「はせでら」に玉をもって「三七日」間修法を行うことであつた。三七日の修法は、三つの七日で二十一日というよりは三十七道品のことであろう。そして、戦乱、航海などの難関をくぐり抜けてきた少将は、この修法を行うことによって、自分自身の状態を完全なものにすることができ、そうすることによって華陽公主の再生も可能となるわけである。

公主の遺言のたまひて、したものこしより、すいしやうのたまの、てに在る程なるをとりいで、つめにわが契をわすれず、の給まゝの心ならば、このたまを身はなたずもちて、いみじき雨かぜのさはぎ、なみのしたなりとも、つめにおとしうしなはで、わが国にかへりたまへ。き

けば、日本にはせでらといひて、観音おはずなり。かの寺にこのたまをもてまいりて、三七日、そのほうををこなひたまへ。さてのみなん、この世の人のそしりを、はで、かならずふた、びあひみるべき」との給て、まだふけぬ程に、かくろへいりたまひぬるなごり、いへばさら也。

(巻一、六六頁)

華陽公主は遺言の中で「なみのしたなりとも、つめにおとしうしなはで」と特に注意をしている。これは、水晶の玉の性質をあらわしているといえる。この海と玉の関係は如意珠と竜王の関係であり、竜王が玉を欲することはよく知られている。筑前国風土記に宗像の神体が玉であることなど、神としての性格もある。玉は「たましい」に通じる言葉である。

つまり、公主は琴の秘曲を伝授し、それを日本に伝えるために、少将と契り、自分の魂を少将に預けたことになり、少将は約束を守ることによって、自分の完成と華陽公主を同時に得ることが出来るのである。

翁の言葉によると「その名をとひ、そのこゑをきかざりしききより、こよひ、こゝにして、君にあはむことをしれき。君は人の国に、ことこのゑをつかへひろむべき契によりて、ち、母をはなれて、わがくに、わたれり。」とあり、物語の第二の

ヒロインである華陽公主とのつながりが出来るとともに、渡唐目的がはっきり示される。しかし、日本に琴の秘曲を伝授するためには様々な障害を乗り越えなければならない。予言者であり、仲介者の老人が迫害されていることが語られている。また、外国に持ち出すことは、さらに危険であり、冒険が必要である。ひとつが戦乱であり、もうひとつが後の存在である。戦乱は、弁少将が成長するための障害としてあるのではなく、戦乱があるがために秘曲の伝授が可能になるのである。后との恋も、同じく乗り越えなければならない障害として位置づけられる。そして、障害を乗り越えてこそ日本に帰って音楽の家を起すことになる。戦乱のために、世に生まれ戦乱の沈静後役割は終わることができる。少将を取り巻く女性たちと環境には、かならず戦乱という共通項が存在するのである。

この戦乱の部分に対して、萩谷氏は『松浦宮物語』解説中の論文に一章を設け、「作者が文人であるにもかかわらずこのような戦闘場面の描写は『松浦宮物語』以前は類を見ない」⁽⁹⁾とし、また、戦闘場面の設定において、「伝奇的性格をこの作者は賦与したことに着目しながらも実験小説であるという論旨によって、恋愛小説としてのプロットはここで中断して、中休みをしているといわねばならない」⁽¹⁰⁾と、あくまでもこの場面を切り放して異質的存在と見なしている。

また、三角氏は物語主題の一貫性を主張し、「三人のヒロインがそれぞれ独自の世界を形成しながら少将と関わりあって一貫性を保っている」⁽¹¹⁾としている。しかし、戦闘場面の描写が果たす物語の一貫性に対する働きには触れてない。

対して、伊井春樹氏は、後の戦略と少将の動きについて述べながら、「弁少将は帝の意志による派遣という体裁をとってはいるものの、唐に渡らざるを得ない宿命を負ってこの世に生を受けていたのである」⁽¹²⁾とし、本来なら直接唐に生まれれば良かったはずが「この国にいささかの縁ある人なく、また弓矢を預るべき所」もなかったため、日本の住吉明神に託したと言う。つまり、物語は後の告白に至って、主人公の愛の遍歴が紆余曲折を経て淡々と語られてきていたものが、一気に謎が解ける。後の告白の内容こそが、物語の出発点である。そして、使命である敵将宇文会を滅ぼすためには、きっかけとして戦乱が取り込まなければならない。また、任務を果たした後は、人間として、もとは仮住まいであったはずの日本に、定着することが許されるのである。このようなプロットは、主人公が最初に生を受けたところが日本であることを除いて考えると、謡曲「海女」に類似した部分がある。つまり、異界としての唐に対して、またその異界である天上界を設定することによって、日本と唐は同じ線上に位置することになり、水平的交流が可能であるということである。また、平

面上の両異界は、天上世界の介在により実質的に異界でなくなるわけである。この異界観とは、「後期物語の異界のサイクルの終点をなすもので、『松浦宮物語』では唐は何ら日本という現実に対する異界ではなく同じ平面上の世界に過ぎなく區別が消失している」というものではなからうか。

謡曲「海女」の場合、唐という現実の異界と共通の異界である竜宮がある。そして媒介者は異界との境界線上にある海女の集団である。⁽¹⁴⁾

ふたつの恋の話型と「孝」

以上でみてきたように、物語の叙述順、空間で考えると、悲恋談として、神奈備皇女と母親のふたつの恋が位置づけられ、渡航談として、華陽公主と后との二つの恋愛があることがわかる。ここでは二つの話型から読みとれる「孝」の問題について考えてみたい。いままでの一般的な理解は、平安時代には、儒教は書物によって学ばれたものの、政治上にあらわれたこともなく、まして文学にはあらわれていない、というものであった。しかし、近年『宇津保物語』に孝子伝からの影響のあることが指摘されており、『源氏物語』における儒教の影響も指摘されている。⁽¹⁵⁾

儒教の中心的な概念である「孝」思想が物語にどのようなあらわれるかを考察しながら、『松浦宮物語』における「孝」

の問題を考える。『伊勢物語』第八十四段に、

むかし、男ありけり。身はいやしなから、母なむ宮なりける。その母、長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうでず。ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さるに、十二月ばかりに、とみのこととて御ふみあり。おどろきて見れば、歌あり。

老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まくほしき君かな

かの子、いたううち泣きてよめる。

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もといゆる人の子のため (二〇二頁)

とあって、ここにはひとり子を思う母の親心が現れている。男は母の歌を見て泣きながら歌を贈ったということであるが、子として親への不孝という自責があっただろう。

次に『宇津保物語』や『浜松中納言物語』の底辺にある「孝」の問題をみながら、渡航談のなかでそれがどのように扱われてきたかについて考えてみる。『宇津保物語』の「俊蔭」は、待望された申し子であり、一人子である。顔かたち才能ともに世にたぐいなくすぐれていた。そんな大切な子が遣唐使に

任命されてしまい、親子三人で血の涙を流して別れを悲しむ。

父母悲しむこと、さらに譬ふべき方なし。一生に、一人ある子なり。かたち・身の才、人にすぐれたり。朝に見て、夕の遅なはるほどだに、紅の涙をおとすに、遙かなるほどに、あひ見むことの難き道に出で立つ。父母・俊蔭が悲しび思ひやるべし。三人の人、額を集へて、涙を落として、出で立ちて、つひに船にのりぬ。

(九〜十頁)¹⁶

俊蔭は途中台風にあい、波斯国に漂着して阿修羅に出会う。

阿修羅、「我ら、昔の犯しの深さによりて、悪しき身を受けたり。しかあれば、忍辱の心を思ふ輩にあらず。しかはあれども、『日本の國に、忍辱の父母あり』と申すによりて、四十人の子どもの愛しく、千人の眷属の愛しきによりて、汝が命を許し給ふ。汝、すみやかにまかりかえ帰りて、阿修羅のために、大般若を書き、供養せよ。汝、日本の本の父母に向かふべき便を与へむ」と、言ふ時に、俊蔭、伏し拜みて言はく「日本より、山を尋ぬる大いなる心ばへは、父母が愛子として、一生に一人子なり。親の顧みの厚く、慈悲の深かりしを捨てて、国王の仰せのかし

こかりしによりて渡れり。その父母、紅の涙を流してのたまはく、『汝、不孝の子ならば、親に長き嘆きあらせよ。孝の子ならば、浅き思ひの浅きにあひ向かへ』と、のたまひき。

(一二頁、傍線引用者)

このような対話において、国王の命に従って唐にわたったが、それが父母への不孝になるということが語られる。俊蔭は、長らく故郷に帰らずにいるので、自分は不孝の人であり、その罪を免れるように、阿修羅の守っている木の切れ端をもらって琴を作り、父母に聞かせたいと願う。

また、俊蔭は、唐にいたって帝に帰国を願い出ながら、日本に年八十になる父母がいるのに見捨てて来ました。いまとなつては、塵、灰になっているかもしれない。しかし、その骨でも見ておきたいのです、といっている。結局二十三年ぶりに帰ってみると父親が亡くなって三年、母親が亡くなって五年になっていた。俊蔭は嘆き悲しんで三年の孝を送った。俊蔭は、帝の命によってやむなく父母を見捨てて出国したが常に父母の存在を忘れずに帰国を所望している。しかし、長きにわたった滞在期間のため、父母はすでに亡き人になっていた。生きて帰って親たちと相まみえることができなかつた俊蔭の無念さを察することができよう。

『浜松中納言物語』においては、主人公中納言は夢に、父故

式部卿が唐の帝の第三皇子に転生した事を告げられ、転生した父に会うため、渡唐を決意する。

孝養の心ざし深く思ひ立ちにし道なればにや、おそろしうはるかに思ひやりし波の上なれど、あらし波風にもあはず思ふかたの風なん、ことに吹きをくる心地して、唐土のうむれいといふ所に、七月上旬の十日におはしましつきぬ。そこを立ちて、かうしうといふ所に泊りたまふ。その泊、入江の水うみにて、いと面白きにも、石山のおりの近江の海思ひ出られて、あはれに恋しき事かぎりなし。

(巻一、三二頁、傍線引用者)⁽¹⁷⁾

とあり、「孝行」をするために渡唐するという、遣唐使即別れの不孝という図式の裏返しが見られる。

では、『松浦宮物語』において「孝」の問題がどのように現れているか、『宇津保物語』や『浜松中納言物語』の先例とともにみていくことにする。

主人公弁少将の出生は、『宇津保物語』の影響も指摘されているように、申し子的な要素があり、一人子であること、優れた才能を持つなどの特徴を持っている。弁少将に遣唐使としての宣旨があり、出国に際して、親も筑紫まで下向して血

の涙を流し、別れを悲しんだ。また、母親は、悲壮な決意をして子が帰るまで松浦に宮を造って待つ。主人公弁少将は、陶紅英なる老人により、使命によって父母と別れる運命にあったことを告げられる。

この国人に乱るるふしなく、恐れ慎みしうへに、心の乱れし衣の裏の珠を得ては、また分くる心を思ひ離れしかど、ただうち見たてまつるより、のたまひ出でつる御言の葉を背くべきかたもなく、ふたりの親の待ちたまふらん故郷を、いま片時もいかでかと思ふ命をだに、この御一言葉に変へんは、え惜しむまじう、あはれに悲しう見たてまつるままに、涙のみ続き落ちて、聞こえ出づべき言の葉もおほえず。(一五二頁、傍線引用者)

また、以下のごとく、両親が生きている間に再会できなければ不孝の罪を犯すことになるので、必ずやその命が尽きないうちに帰国したい、としている。

器物にも耐へず、齡至らずして、まかり渡りしはじめ、ふたりの親の思ひ惑ひし志、またあひ見ずは、後の罪ざりどころなく見たまへし時は、かたじけなき御あはれびありて、返し遣はされば、その命尽きぬ先にあひ見んばか

りや、故郷に向かふ喜びにはべるべきと思うたまへしゆ
ゑひとつにこそはべれ。(一五二―一五三頁、傍線引用者)

『松浦宮物語』では、母親が悲壮な決意で子の帰りを待っている状況をふまえ、唐後の口から、待つ人が深い愛情を持っていてその愛情に背きにくいのでそのまま帰国し、故郷の両親の死後まで見届けて再び唐に渡らないかといっている。父母と生きて再会すること、父母が生きている間は孝行を尽くすことの重要性が語られているのである。

唐後は、父母の死を見届けることができて、なお自分自身の(唐后)の臨終のときにも見届けに来てほしいと弁少将にねがう。そしていよいよ許可がでて、別れをおしみながら船出をし、松浦の地で待ちわびている母親と再会をはたすのである。

さしも守り強き御道のしるべなれば、松浦の宮に待ち喜
びたまふほどのことも、ただおしはかるべし。

(二五二頁、傍線引用者)

おわりに——新しい読みの提示は可能か

『松浦宮物語』はひとつの主題、——主人公弁少将恋愛の悩み

が尽きない——に貫かれた構造的な作品である。実験小説として構想の破綻を来しているわけではなく、主人公をとりまく神奈備皇女、母親である明日香皇女、華陽公主、鄧後の四人の女性の様々な形を描いている。また、内面にながれている「孝」と「公私」の間に葛藤する主人公をみることができる。「孝」の実現のために「回帰」する物語において、日本のふたつの恋は回帰するための直接的な原因を提供しているといえよう。唐でのふたつの恋は主人公の「家」の繁栄のための要因である。そして物語全体は、大卒の「孝」の実現のために動いていて、きっかけである悲恋、発展の渡航談とともに「孝」の要素をもっており、その「孝」の実現のために主人公が努力している姿を見ることができよう。

松浦の地に対するいくつもの伝説は、『万葉集』においては遠征に伴う男女間の別離が主なテーマであり、別離の悲しみと貞女としてのイメージが相まって「松浦さよ姫」が詠まれるようになった。しかし、日中を舞台に三つの恋愛を繰り広げる『松浦宮物語』において題名との関わりを考える上で、「待ち人」が母親であることが疑問であった。そこで、親子の情愛、孝という視点で『松浦』をみると、『宇津保』での不孝(帰国時にはすでに親が亡くなっている)、『浜松』の亡き父への孝養の為の渡唐、を現世における「孝」というかたちで克服

すべく位置づけられているように思われる。親への孝養というテーマを松浦のイメージと重ね合わせれば物語の題名が持つ「必然性」がはっきりしてくるのではないか。

註

- (1) 三角洋一、「松浦宮物語」の主題と構想」〔物語の変貌』若草書房、一九九六年)
- (2) 萩谷朴、『松浦宮物語全注釈』(若草書房、一九九七年)
- (3) 三角洋一、前掲注(1)、『松浦宮物語』の主題と構想」
- (4) 母親は、本来恋の対象ではないが、自分自身を松浦さよ姫に準えていること、国境の地に宮を造って息子の帰りを待つことなどから、松浦さよ姫としての恋とみることができよう。
- (5) 以下、『松浦宮物語』の引用は、『松浦宮全注釈』(萩谷朴著、若草書房、一九九七年)により、頁数を示す。
- (6) 三角洋一、前掲注(1)、『松浦宮物語』の主題と構想」
- (7) 『伊勢物語』(渡辺実校注、日本古典文学集成、新潮社、一九八七年)
- (8) 以下、『源氏物語』の引用は、『源氏物語』(鈴木日出男ほか校注、新日本古典文学大系、岩波書店、一九九九年)により、頁数を示す。
- (9) 萩谷朴、前掲注(2)、『松浦宮全注釈』の解説
- (10) 萩谷朴、前掲注(2)、『松浦宮全注釈』

- (11) 三角洋一、前掲注(1)、『松浦宮物語』の主題と構想」
- (12) 伊井春樹「松浦宮物語の方法」『詞林』15号、一九九四年四月
- (13) 伊井春樹、前掲注(12)
- (14) 竜王から「玉」をとりかえす役割で、人間のいる地上と竜王の海を往復している。

二月

- (15) 田中徳定「平安朝物語における儒教」『駒沢国文』二〇〇一年
- (16) 以下、『宇津保物語』の引用は、『うつほ物語 全』(室城秀之校注、おうふう、一九九五)により、頁数を示す。
- (17) 以下、『浜松中納言物語』の引用は、『浜松中納言物語』(池田利夫校注・訳、新編日本古典文学全集27、二〇〇一年)により、巻数と頁数を示す。